### 慶應義塾大学学術情報リポジトリ

Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	初期作品にみるトマス・モアの社会思想
Sub Title	Sir Thomas More's social thought appeared in his earlier English works
Author	渡辺, 和一郎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1960
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.53, No.6 (1960. 6) ,p.521(23)- 534(36)
JaLC DOI	10.14991/001.19600601-0023
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19600601-0023

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって 保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

月「K丸新造借入申入書」静岡県O漁協資料)…直ちに失業に追いやる結果となり他船を含めた全乗組員に対す…大型鮪専業船に移乗させることは年齢的労働条件から推して…

その差は漁獲物の保管設備の相違が一因をなしている。漁獲物の事者一人当り漁獲量の差は小であるが、漁獲金額の差は著しい。(注3) 二〇〇屯以上層と一〇〇~二〇〇屯層を対比するとき、従

でなければならない。価値維持の為に、冷凍・冷蔵設備を設置するには、漁船規模が大

の蹉跌を生ずるに至りました。」(前出資料) に依り購入する 結果となり是に依り 一〇、○○○千円の資金計画業権の値上りは 驚くべき急騰を来し、 遂に……一五、○○○千円、漁べき急騰を来し、 遂に……一五、○○○千円、漁

# 初期作品にみるトマス・モアの社会思想

渡

辺

和

郎

三 リチャード三世の歴史 一 ピコ・デラ・ミランドラ伝ー モアとイギリス・ルネサンス

一・モアとイギリス・ルネサンス

ンドラ伝」、「リチャード三世の歴史」を経て「ユトーピア」を書くいるといえよう。必ずしもモア自身は、それを境に変貌しているの発籍の扉にかかげられ、漸くヨーロッパは宗教改革の時代に入の免罪符(Indulgence)を非難する九十五ヵ条がヴィッテンベルの免罪符(Indulgence)を非難する九十五ヵ条がヴィッテンベルの免罪符(Indulgence)を非難する九十五ヵ条がヴィッテンベルの免罪符(Indulgence)を非難する九十五ヵ条がヴィッテンベルの免罪符(Indulgence)を非難する九十五ヵ条がヴィッテンベルの免罪符(Indulgence)を非難する九十五ヵ条がヴィッテンベルでいる。それを反映してモアの作品も、以後多くは宗教論争の形をとるに至る。この頃の宗教論は、同時に政治論の含みをもっているとこのような後半生の宗教改革期に対して、「コーピア」を書くといる。このような後半生の宗教改革期に対して、「コーピア」を書くいるといえ、「リチャード三世の歴史」を経て「ユース・ローピア」を書くないるといる。

彼の正しい理解に到達しようとするものであるが、ここでは、今迄なかった。彼をもって近代社会主義の先駆者となしたり、或いはなかった。彼をもって近代社会主義の先駆者となしたり、或いはなかった。彼をもって近代社会主義の先駆者となしたり、或いはなかった。彼をもって近代社会主義の先駆者となしたり、或いはかられる。それ故、モアの精神形成の全過程を跡づけることによって、ちれる。それ故、モアの精神形成の全過程を跡づけることによって、た至る前半生は、ルネサンス期と呼ぶにふさわしいと言えよう。に至る前半生は、ルネサンス期と呼ぶにふさわしいと言えよう。に至る前半生は、ルネサンス期と呼ぶにふさわしいと言えよう。に至る前半生は、ルネサンス期と呼ぶにふさわしいと言えよう。

モアの作品は英文とラテン文の両方にわたっている。当時のヒュ

想を明らかにしたい。

りあげ、主としてこの時代の作品を通して初期のトマス・モアの思比較的看過ごされがちであったルネサンス期のモアを対象としてと

三三五三二

初期作品にみるトマス・モアの社会思想

るモアの思想発展史をたどることによって、モア理解への糸口としるモアの思想発展史をたどることによって、モア理解への糸口としるが、リチャード三世の歴史を通して、やがてユトーピアに開花すたものが英文で書かれており、政治活動に入って以後政治家への通信が英文でなされているという具合である。それ故、今ここで取り息落されることを認めなければならぬ。その点を注意しながら、ル見落されることを認めなければならぬ。その点を注意しながら、ル見落されることを認めなければならぬ。その点を注意しながら、ル見落されることを認めなければならぬ。その点を注意しながら、ル見落されることを認めなければならぬ。その点を注意しながら、ルーマニスト達にとって母国語を用いるか否かは、単なる気紛れによーマニスト達にとって母国語を用いるか否かは、単なる気紛れによーマニスト達にとって母国語を用いるか否かは、単なる気紛れによーマニスト達にとって母国語を用いるか否かは、単なる気紛れによーマニスト達にとって母国語を用いるか否かは、単なる気紛れによーマニスト達にとって母国語を用いるか否かは、単なる気紛れによーマニスト達にとって母国語を用いるか否かは、単なる気紛れによーマニスト

学その他でギリシャ語を教授したことである。十五世紀後半ギリシ により、多くのギリシャ学者が難を避けてイタリアにいき、各地の大 傾向を決定的にするのは、一四五三年コンスタンチノープルの陥落 1350~1415)がビサンチンより渡来し、 そのイギリス・ルネサンスとの接触をかえりみておく必要がある。 を復活しようと試みている。しかしそれは一般の風潮として広く根 するためには、ルネサンス運動の故郷イタリアの事情を明らかにし、 を超人的な努力によって進めたその影響などに始まる。さらにこの は十四世紀も終り、マヌエル・クリソロラス(Manuel Chrysololas をおろすには至らなかった。漸くギリシャ語の研究が盛んになるの ラルカ、ボッカチョを先駆者として、古代ギリシャ・ローマの古典 は言うまでもないが、イタリアのルネサンスは十四世紀すでにペト ギリス・ルネサンスの素描が完成するといっても差支えないであろ マニスト、エラスムスを彼自身の手紙の中の顔ぶれに加えるなら、イ きない人物である。このコスモポリタンなオランダ生まれのヒュー \*語研究が飛躍的に進歩したのは事実であるが、 エラスムスもまたイギリス・ルネサンスにとっては忘れることので と広く豊かなことか。素晴らしいものだ。」といっている。しかし、 れ以上名前をあげるに及ばない。この国の古典研究の収穫は、なん ルネサンス(Renaissance)の本来の意味が「再生」であること ナのチリアコ(Ciriaco d'Ancona 1391~1455)が古写本の蒐集 トマス・モアの背景をなすこの様なイギリス・ルネサンスを理解 一方十五世紀の初めアンコ

その上に立つ新しい自由な人間観は近代思想史に貢献をなすもので ゆる思想の背後に、唯一の普遍的な真理を認めようとした態度や、 は必ずしも具体的な成果を生みださなかった。それにも拘らずあら 思想と調和させようとして新プラトン神学を唱えたが、彼等の努力 想の研究へと成長していくのである。 フィチーノ や ピコのごとき 学的なものにとどまるものから、次第にその背後にあるギリシャ思 でになっている。この間、ギリシャ語の研究は最初の言語学的文献 Ficino 1433~1499)によってプラトンの翻訳がなしとげられるま 文献学的な研究の域をぬけでるのに容易でなかったこと を物語る 伝統的なキリスト教の信仰をふまえながら、それを新しいギリシャ 転化を、身をもって示しているものと言えよう。 彼等は中世以来の れたのが、一四八七年であった。このことはギリシャ学が言語学的 ラテン文のギリシャ語文法が著わされたのが、一四九七年、ジョヴ ァンニ・クレストン(Giovanni Creston)の希羅辞典が公けにさ らなかった。又、ウルバノ・ボルツァニオ(Urbano さえもギリシャ語をラテン文の註釈とつきあわせながら読まねばな やピコ・デラ・ミランドラ(Pico della Mirandola 1463~94)で さるべきではない。ポリツ ともあれ 一四八四年には マルシリオ・フィチーノ(Marsilio イタリア・ルネサンスが古典の文献的研究から思想的探究への ィアーノ(Angelo Poliziano 1454~94) Bolzanio) 6

イタリア・ルネサンスをかえりみる場合、その地方によって古典

形古代の再生ぶりにかなりの相違があることになり、自ら独特な色がエネツィアは国際的商業都市にふさわしく、広くヨーロッパ各地で、不の遺跡の調査発掘という形をとり、フィレンツェはそのプラトーマの遺跡の調査発掘という形をとり、フィレンツェはそのプラトーマの遺跡の調査発掘という形をとり、フィレンツェはそのプラトの方にネツィアは国際的商業都市にふさわしく、広くヨーロッパ各地がルーマの遺跡の調査発掘という形をとめることになり、自ら独特な色がら、一マの遺跡の調査発掘という形をとめることになり、自ら独特な色がを帯びてくる。

 (事の古典への興味も立ち消えに終る傾きが強かった。しかし彼等な等の古典への興味も立ち消えに終る傾きが強かった。しかし彼等は一向にルネサンスを受け入れる素地ができてはいなかったので、は一向にルネサンスを受け入れる素地ができてはいなかったので、は一向にルネサンスを受け入れる素地ができてはいなかったので、カアを訪れるのは、ローマ法王庁に出向く聖職者か政府の役人にすぎなかった。彼等はイタリア・ルネサンスに触れながらも、充分にその意義を理解するにいたらなかったが、また一方、多少ともルネサリアを訪れるのは、ローマ法王庁に出向く聖職者か政府の役人にすずなかった。彼等はイタリア・ルネサンスに触れながらも、充分にその意義を理解するにいたらなかったが、また一方、多少ともルネサリアを訪れるのは、ローマ法王庁に出向く聖職者か政府の役人にすずなかった。後等はイタリア・ルネサンスに触れながらも、充分にその意義を理解するにいたらなかったが、また一方、多少ともルネサリアを訪れるのは、ローマ法王庁に出向く聖職者か政府の役人にする。

 (中国人の興味も立ち消えに終る傾きが強かった。しかし彼等は手がよります。

でも良いであろう。
でも良いであろう。
ともあれ彼等は最初にルネサンス第一期の人々と呼んとができよう。ともあれ彼等は最初にルネサンスの洗礼を受けたりィリアム・ティリィ(William Tilly of Selling)の名を数えることができよう。ともあれ彼等は最初にルネサンスの洗礼を受けたことができよう。ともあれ彼等は最初にルネサンス第一期の人々と呼んでも良いであろう。ともあれ彼等は最初にルネサンス第一期の人々と呼んでも良いであろう。

始まって ことを示すかも知れない。ともあれイタ リ アの ヒューマニスト達 自由が脅かされた如く、次第に独立と自由に暗い影がさしてきたこ アの諸都市が、たとえばメディチ家の専制によってフィレンツェの とを反映して、思想の内部の自由という消極的な態度に陥ってきた 幼少にしてギリシャ語を学んだこれらの人々は、一四八〇年代から 備されていた。この一群とは、リナカー もその頃、 九〇年代にかけ、相次いでイタリアへ遊学することになる。あたか 文献もすでに或る程度、これら新人の渇きをいやすに足るものが準 ーシン (William Grocyn)、コレット (John Colet) 等である。 なりにも身につけた人々の一群が育ってくる。ヒューマニズムの 次にこの人々によって幼少の中からギリシャ語を教えられ、まが フィチーノやピコの出現によってギリシャ思想への沈潜が いた。この裏には久しく都市の自由を主張してきたイタリ イタリアのルネサンスは古典の言語学的文献学的研究が (Thomas Linacre), j

> ス・ヒューマニスト第二期の人と考えることができる。 に遊んでルネサンスの聖火をイギリスに 持ち 帰っ た 人々をイギ のような僧侶の出身としてギリシャ語を身につけ、やがてイタリア ができたというイギリスの教育事情にも負っていると言えよう。 を武器として聖書の研究を大胆に押し進める。イギリス・ルネサン マニストが僧侶階層として早くからギリシャ語の教育に接すること タリア・ルネサンスの当時の形勢とともに、彼等イギリスのヒュー スの宗教的性格が、かくして色濃く現れるのであるが、それにはイ えよう。彼等の講じたのはギリシャ思想にとどまらず、ギリシャ語 学」(New Learning)の名で、たちまち若い世代の心をとらえて 講堂に立つのは一四九○年代であり、その独自な新しい学風は「新 しまう。 立ち至っていた。イギリスの留学生達がイタリアで目撃したのは、 伝統的なキリスト教思想とそれを如何に調和すべきかという問題に ンスに影響を与えることになる。彼等が帰国してオックスフォドの 正にルネサンスのかかる局面であり、そのことがイギリス・ルネサ は、ギリシャの言葉よりも思想の内容に関心を深めていくにつれ、 ここにイギリス・ルネサンスの静かな嵐はまきおこるとい

へ呼びもどし、リンカーンズ・イン(Lincoln's Inp)附属の法学More)は息子の古典への 情熱を嫌って、法律研究のためロンドン新しい学問に心を奪われたとみえる。彼の父ジョン・モア(John 度オックスフォドはルネサンスの 渦中 に あ る。モアは早くもこの下マス・モアがオックスフォドに入学するのは、一四九二年、丁

解するも差支えないであろう。モアは一五〇四年の暮には、ピコ・ 思われる。 デラ・ミランドラ伝を翻訳するのであるが、その動機のなかにはこ によっても充分に察することができる。この時グローシン、リナカ のは、彼の将来に大きな意義をもつことを、やがてわれわれは見出 れた。これは一四九四年のことである。それにも拘らずモアのヒュ のようなヒューマニストとしてのモアの悩みがひそんでいたように は何を意味するであろうか。われわれはモアにおいてもはやイタリ のヒューマニストの先輩に交えてモアの名を挙げている前述の書簡 すであろう。法律を習いながらもモアがヒューマニストとして成長 ものであり、ここにヒューマニストの新しいタイプをみることがで マニストが成長してきた事を認める。しかも彼は先輩ヒューマニス ア留学を敢えてしなくとも、イギリス国内でイギリス独自のヒュー していったことは、一四九九年イギリスを訪れたエラスムスが、他 しかし最初はモアの不本意にせよ、ここで法律を学ぶことになった トとは異なり、僧侶出身ではなくロンドン市民を背景に育ってきた マニズムへの情熱は、冷めることなく燃え続けるのであるが、 コレットのイタリア帰りのヒューマニストに並ぶことができる トマス・モアがヒューマニストの風格をそなえていたこと かくしてモアをイギリス・ヒューマニズム第三期の人と理 of Chancery) であるニュー ・イン (New Inn) に入

## 一 ピコ・デラ・ミランドラ伝

<u>ځ</u> 深いものがある。モア訳「ピコ伝」(The life of John Picus Earlピコがイタリア・ルネサンス唯一の思想家といわれるだけに、興味 of Mirandula)は、翻訳とはいうものの単なる翻訳にとどまるも いうべく、思いつきの翻訳として軽く見過すべきではない。恐らく をモアが選び翻訳し、それに解説をほどこしたものであり、第三部は 年のヴェネツィア版によったとみられる。第二部はピコの書簡三通のが原典となっている。モアの翻訳はボローニャ版か又は一四九八 六年ボローニャで刊行されたピコの作品集への解説として書いたも(Giovanni Francesco Pico, 1469~1533)が、ピコの死後一四九 ス・リィ(Joyeuce Leigh)に手紙を寄せて翻訳の動機を語り、ピう。このピコ伝の序文として、モアは友人の妹である修道尼ジョイ ら抜萃し編纂した上で翻訳し註釈を加えることにもなったのであろ は前述のピコ作品集をモアが愛読した成果として、自由にその中か っている。したがって全篇の構成は、モア自身の意図になるものと ピコが座右銘とした十二の言葉を主題に、モアが自作した詩篇とな ピコが旧約聖書の詩篇に註解を試みたものの訳出である。第四部は(3) コ伝であり、これはピコの甥ジョヴァンニ・フランチェスコ・ピコ のではない。その内容は四つの部分に分れる。第一部がいわゆるピ コの生涯の中に豊かな精神生活の手本をみいだすことができるとい マス・モアが「ピコ・デラ・ミランドラ伝」を訳出したのは、

本学の関係としてこの翻訳をこの修道尼におくろうと述べている。モアは心の糧としてピコ伝を読み、修道のよすがにもとJoyeu-Ge Leigh のために英訳したのであろうが、ピコ伝の内容は一女性の理解力に相応するように、原著を適宜に省略したり、又いくらかれ百のテーゼをかかげて、世界の学者に公開の討論を挑んだ件や、中少の頃、東方の諸学にまで研究心を燃やしたその学問の内容については、深くは立ち入って論じようとしない。そのためピコ晩年のいては、深くは立ち入って論じようとしない。だがこの理由でモアニズムの面が薄らいでいる傾きがなくもない。だがこの理由でモアニズムの面が薄らいでいる傾きがなくもない。だがこの理由でモアニズムの面が薄らいでいる傾きがなくもない。だがこの理由でモアニズムの面が薄らいでいる傾きがなくもない。だがこの理由でモアニズムの面が薄らいでいる傾きがなくもない。だがこの理由でモアニズムの値が薄らいでいる傾きがなくもない。だがこの理由でモアニズムの値が薄らいでいる傾きがなくもない。だがこの理由でモアニズムの値が表示である。

の数が少なくないことも、このような推測を助けるであろう。一例も、モアの先輩であるリナカーやグローシンがイタリアに遊学しフィレンツェに滞在した頃は、すでにピコもこの学問の都でフィチース中レンツォをはじめ多くのヒューマニストの歓迎を受け知己を得て、フランス 遍歴の途にのぼったあとであり、彼等イギリス留学生得で、フランス 遍歴の途にのぼったあとであり、彼等イギリス留学生にかったことはあり得まい。しかもピコと彼等との間には共通の公開討ないためフランスからローマへ意気高らかに帰ってくる。ローマ法語であるリナカーやグローシンがイタリアに遊学しフィアの数が少なくないことも、このような推測を助けるであろう。一例の数が少なくないことも、このような推測を助けるであろう。一例の数が少なくないことも、このような推測を助けるであろう。一例の数が少なくないことも、このような推測を助けるであろう。一例の数が少なくないことも、このような推測を助けるであろう。一例の数が少なくないことも、このような推測を助けるであろう。一例の数が少なくないというというによりである。

推察することができよう。 で主張されている人間の意志の自由と符合していることによっても は、ピコの書簡に附したモアの解説が「人間の尊厳について」の中と思われるピコの若年を見落すべきではないであろう。このこと 交流の折、 まい。モア訳のピコ伝から早急に判断して、モア自身承知していた (Oratio, ネサンスの鬼才ピコ・デラ・ミランドラの輝かしい存在を耳にした 得る ならば、リナカーやグローシンが帰国してオックスフォドに 紹介されたとみるが、むしろ自然ではなかろうか。そのことがあり 力するのは、創業間もなくである。この国際的なヒューマニストの ヒューマニストの姿であり、後年の枯淡閑雅の聖者の趣きではある ことであろう。しかもその ピコ は 「人間の尊厳についての演説」 「新学」の気風がみなぎった時、学生トマス・モアはイタリア・ のは一四八九年であるから、リナカー、グローシンが彼に会って協 みあった間柄である。アルドゥスがヴェネツィアに印刷業を創める 郷里ミランドラではピコの許に二年間滞在しお互いに古典研究を励 で、フェララ(Ferrara)での学友であったばかりでなく、ピコの が、このアルドゥスはピコ・デラ・ミランドラとは並々ならぬ関係 1450~1515)に協力してアリストテレスの版行をすすめるのである の印刷家アルドゥス・マヌティウス(Aldus Manutius Romanus をあげれば、グローシンやリナカーはヴェネツィアを訪れて、 de Dignitate hominis 1486) にみられる覇気にみちた アルドゥスの口から親友ピコの存在がイギリス留学生に

フランチェスコの手になった点ではすぐれた条件を備えた伝記では 的色彩を濃く帯びたものとなったことは争えまい。 あるが、彼もまた叔父ピコ同様その執筆当時にあってはサヴォナロ ンチェスコ・ピコによるピコ伝は、叔父の良き思想の後継者である もこの著作集の解説として加えられたピコの甥ジョヴァンニ・フラ 行を知ったのは、コレットを介してであったとみてよかろう。しか モアにまで伝えることになったのであろう。モアがピコ著作集の刊 滞在は恐らくピコの死去した頃にあたっていたとみられる。又、彼 が、このようなピコをモアに紹介したのは、コレットであった。コ印象されたことは、そのピコ伝の著しい宗教的要素で明らかである の帰国はピコの著作集がボローニャで刊行 され た 一四九六年であ レットの大陸遊学の足跡は明確にされてはいないが、彼のイタリア ラの圧倒的な影響の許にあった。そのため彼のピコ伝自体が宗教 ラの熱烈な倫理的宗教的実践の影響を受けたピコの思想を、コレ ト自身の火をふくような激しい宗教的性格と相まって、 モアにピコ・デラ・ミランドラの晩年の信仰に生きる姿が、強く 彼の著作にはピコの影響が少なくないと言われる。サヴォナロ トマス・

ューマニストとしての姿をモアが知っていたからではなかろうか。を慕わしいものに思わせたのは、若年の日のピコの光輝にみちたヒ身の晩年の思想によるものであるが、しかしそのようなピコの晩年を示していることは疑問の余地のないところであり、それはピコ自モアの「ピコ伝」がすぐれて宗教的な性格と倫理的実践への意欲

しるべとなった。
もの生涯が、精神的な危機に立つモアにとって偉大なる道がいてゆくピコは、聖職に身を置くことなく俗人としての生命を全歩いてゆくピコは、聖職に身を置くことなく俗人としての生命を全ヒューマニストとして輝かしい業績を残しながら、信仰の道を求め

衣をまと さることを意味しなかった。むしろイギリス・ヒューマニズムは教 て僧侶の道を選ぶことは、必ずしもヒューマニズムへの愛着を捨て 僧侶となるか法律家として立つかの問題であった。だがモアにとっ の選択に悩むモアの姿がここにうかがえる訳であるが、具体的には がある。 によって育くまれてきたのであり、キリスト教を度外視してモア以 会関係者の中からイタリアを訪れ、ルネサンスの動きに触れたもの いるが、 った。コモン・ロー(common law)を法学院で研究しながらも、 ンで法律を学ぶことになるが、古典への情熱を断つことができなか りヒューマニズムの洗礼を受けたモアは父の意向にしたがいロンド 俗いずれの道をとるかに迷っている時の解決をそこにみたと述べて 一五〇一年以来カルト派の修道院に誓いは立てぬままに通って、 なると語っており、又、ステープルトン となったのか。すでに調べたようにモアの序文は、それが心の糧と このようにして知ったピコの生涯が、いかなる意味でモアの導き しかしその事の意味を、 オックスフォドで リナカー、 い睡眠を減らし修道僧なみの苦行を重ねる。聖俗二つの道 マニズムをイギリスで考えることは困難であった。 今少し立ち入って考えてみる必要 グローシン、 (Stapleton) はモアが聖 コレットによ

初期作品にみるトマス・モアの社会思想

究のためにギリシャ語の本格的な習得を思いたち、 **義して聴衆を魅了したのは、パウロ書簡についてであり、この講義** 味も含まれていた。イタリア帰りのコレットがオックスフォドに講 アをして聖職への道を執拗に思わせる事になったものであろう。だ が僧侶の出身であり、ヒューマニズムは僧侶階層によって担われて たと言えよう。 の大業である聖書の註釈として実を結ぶことになる。かくしてイギ に渡英中のエラスムスが啓発されて自己の使命に目覚めて、聖書研 れを受け継いだイギリス・ヒューマニズムの古典の復興は、ギリシ ト教を調和させようと試みている著しく宗教的な時代であった。そ ったルネサンスはフィチーノやピコにより、ギリシャ思想とキ このような精神的風土に育ったイギリス人留学生が、イタリアで知 ではあったろうが、それにふみきるには矢張少なからぬ抵抗を覚え はうらやむべき特権階層に属するものとして、魅力のある栄達の道 馴染み深い道ではなかった。ある意味では市民階級にとって、 のに反し、ロンドンの市民層育ちのモアにとって、聖職はそれほど がモアの先輩達は当り前なコースとして僧侶の道にすすんでいった ムへの道と別のものとは映らなかったかも知れない。古典への情熱 たと考えられる。それ故モアにとって聖職への道はヒューマニズ スのヒューマニズムはキリスト教と切り離し難い関係に立って 尊敬する先輩ヒューマニスト達にならおうとする念願とが、モ ーマの古典にとどまらず、ギ モアの尊敬するヒューマニストの先輩達は、 リシャ語による聖書の研究の意 やがて彼の生涯 殆んど

と思われる。たであろう。モアと先輩との間にはこのような断層がひそんでいた

通する一般的な法律の体系へと発展し、コモン・ロ 専らローマ法や教会法を講じ、コモン・ローを蛮民の法として無視 を通して遂に厖大な法体系を形作るにいたった。それに連れてコモ モン・ローであった。オックスフォドとケンブリッジの両大学では Chancery)が創設され、コモン・ロー研究の学府となった。コモ ン・ローの詳細に精通した法律家の必要が切実になり、ロンドンに していたけれども、漸くイギリス固有の慣習法が、 ってゆくのをためらわせる。モアの学ぶ法律は、イギリス固有のコ が感じられたであろう。 密接な関係のあるコモン・ローの世界にもまた容易に捨て難い魅力 けていた。次第に力強く拾頭してきつつあるロンドン市民層の中に ン・ローは法の領域で教会法の分野と対立し、一般市民生活を裏附 一方、不本意ながら始めたにせよ、法律の研究がモアを聖職に入 つの法学院(Inns of Court)とそれに附属した法学院(Inns 身近かにその逞ましい発展を知るモアとしては、市民生活と 国内各地方に共 裁判所の判決 얁

る。法律研究と修道生活との矛盾に苦しみながら、漸くモアの見出ローの法律家としての自覚との対決という形で現われたと考えられ代をになって成長してくる市民層の生活と結びついているコモン・問題とは、ヒューマニズムを背景とする聖職への憧れと、新しい時かくして、いわゆる聖俗いずれの道をとるかの岐路にたつモアのかくして、いわゆる聖俗いずれの道をとるかの岐路にたつモアの

できるであろう。
した解決は、ピコ・デラ・ミランドラの俗界に生き、しかも信仰に 生きるヒューマニストとしての雄々しい姿であった。一五〇四年に は修道院に別れを告げ、法律家の道で立つ志を固め、不浄な僧侶で と結婚する。このような精神的な危機を克服する指針としてモアは と結婚する。このような精神的な危機を克服する指針としてモアは と結婚する。この危機を克服したモアは、コモン・ローの法律 家として生きると同時に、俗界にあってピコの如く立派なヒューマ ニストとして生きようと志すのである。ここにイギリスのヒューマ ニズムは、市民層の中から新しい担い手をみいだしたということが できるであろう。

### 三 リチャード三世の歴史

鮮に感じられたからであったが、ヒューマニストとしてのモアは、いち浮き上って硬化した中世のスコラ学派とは問題を取扱う。生粋をはじめ、ロンドン市民とりわけ商人層の法律問題を取扱う。生粋の市民育ちであったモアが、一層深くその仕事を通して自己の属する階層の事情に明るくなり、愛着をもつようになる。ヒューマニストが古典の世界に情熱をいだくのは、そこに古代人の自由に人間らトが古典の世界に情熱をいだくのは、そこに古代人の自由に人間らトが古典の世界に情熱をいだすからであり、それがもはや現実生活しく生きた活動生活をみいだすからであり、それがもはや現実生活しく生きた活動生活をみいだすからであり、それがもはや現実生活の市民である。生命では、ロンドン・ローの法律家として立つトマス・モアは、ロンドン毛織

今法律問題に立ち入っていくにつれて、単に古典の中にみる人間生今法律問題に立ち入っていくにつれて、単に古典の中にみる人間生たのような立場を、かなり明瞭にうかがわせるものがある。 そのような立場を、かなり明瞭にうかがわせるものがある。 そのような立場を、かなり明瞭にうかがわせるものがある。

出版されるのは、そのような性質による面もあったであろう。 三~四年に執筆されながら、正式には死後一五五七年になって漸く したまま未完に終ったのも、 歴史はモアにとっては同時代史として書かれたものだった。 余りの時の出来事、彼のもの心ついた頃のことであった。即ちこ 四七八年であるから、 も扱うもののようであったが以上で途切れている。モアの誕生が一 の意図は、更にヘンリィ七世(Henry VII 1485~1509)の治世を IV 1461~1483)の死からリチャード三世(1483~1485)の即位ま 容に本質的な違いはないとされる。それはエドワード四世 らは同時に平行して書かれたものと考えられているが、英国民向け と国際版としての外国人向けとの僅かな相違はあるにせよ、その内 「リチャード三世の歴史」は英文とラテン文との二種があり、それでのような立場を、かなり明瞭にうかがわせるものがある。 極く短期間をおおうにすぎないので、しばしばエドワード五世 V 1483)の歴史だと言われるのも不思議ではない。 リチャード三世史に扱われる事件はモア五歳 モア自身の多忙もさることながら、 (Edward 五. モア

チャード三世の歴史」の内容を概観しておこう。よろう。この英語でかかれた最初の英国民の歴史とも言われる「リ由に同時代史の筆を続けることが困難な時勢になってきたことにも

女を連れて、 捕え、王子つまり今やエドワード五世を自分の自由な支配のもとに 奪いとりたいとリチャードは考えるが、サンクテュアリィの掟はそ 認められて良いのか、という議論が起る。泥棒が他人の財産を奪っ 隠れ場である。王妃の示した不信に腹をたて、せめて王子だけでも る。ここは治外法権でみだりにそれを犯してふみ込む訳にゆかない おさめる。リチャードの謀叛をきくや王妃エリザベスは他の王子王 げてくる。出迎えをよそおったリチャードは、リヴァースを敷いて 有の法であるコモン・ローが支配するのを拒絶する権利が存在する されてよいのかといった調子である。これは教会の中にイギリス固 れを許さない。そこで王国の中に王国の法律の手の届かない場所が ことに対する不満である。王国の法律コモン・ローを支持するモア て聖域に逃げこみ、その財産で一生を安穏に暮す、そんなことが許 エドワード四世の死の知らせに、辺境の守りについていた幼い王 ードは、叔父リヴァースに連れられ急ぎロンドンへ引きあ ここに認めることができる。 ウェストミンスター寺院の聖域(sanctuary)に逃れ

牲になるのであるが、その大胆不敵な手口にもか か わ ら ず、そのは、容赦なく片附ける。ヘースチング卿や ス タ ン リィ卿もその犠リチャードは自分の簒奪計画を押し進 める 上で 邪魔になる人物

あった。 になり、 のの、 てエド に導こうと苦心する。 ぶ。買収した市長や口達者な神学者達をかりだして、世論を好都合 白い対照になっている。更に、いよいよリチャードが即位する段階 気をつかう態度と、それを冷かに見透している市民達の様子とが面 **敷ききれはしないのである。リチャード一派の市民に対して小心に** 達は、その中に周到に準備された陰謀をかぎつけて冷笑している。 正当防衛に立ったのだと市内の各所に布告をだす。しかし一般市 叛の元兇はヘースチング等であると言いふらし、自分は巳むを得ぬ は、臆病なほど神経質である。用心深く手廻しをして、この度の謀 ような事件が一般市民の間にどのような反響を生みだすかについて 民衆の一隊をくり入れて「リチャード三世万歳」を口々に叫ばせて なっていく。 ない。静かに暗黙の非難をもってリチャード一派にこたえるのみで た。ところが、市民大衆はリチャード新王万歳を唱える気配も示さ たて、市民をしてリチャードこそはわれらの王と叫ばせようと試み あって無効であり、 ード五世の王位は正当なものではなく、唯一の王位継承者こそリ 局面を好転させることもできないで、ますます無様な事態に ワード五世に王位継承の資格はない、と虚実を構わずあばき ドであると呼びかける。エドワード四世の結婚が二重結婚で 手をかえ人をかえて、市民大衆を有利に動かそうとするも 市民の絶大な賛成を獲得しようとして苦肉の策をもてあそ あげくの果ては、市役所前の広場の後から、 四世の出生は母の不義によるものである。 市役所の前に群がる市民大衆に向って、 やとわれ エド

ところで、この歴史は筆を断たれている。とは自分達の知ったことではない、所詮王様達のお芝居だ、それもりことになる。遂にはリチャードの腹心のバッキンガム公も、リチチャードは自分の即位の邪魔になる王子達を、無残に殺害してしまう。この様な惨事は一層市民の心をリチャードから引き離してしまりことになる。遂にはリチャードの腹心のバッキンガム公も、リチャードの残虐に却て身の危険を覚え、エリイの僧正と叛乱を目論むキードの残虐に却て身の危険を覚え、エリイの僧正と叛乱を目論むところで、この歴史は筆を断たれている。

海の水が湧き立つようなものだ。 然と近づいて来る危険を感附くんだね。ちょうど大あらしの前に、 「大改革の起る前は、いつでも然うだ。神の賜わった 本能て奴で、自鑑されているとみていい、それに反しシェイクスピアの描く市民は費されているとみていい、それに反しシェイクスピアの描く市民は 半の頁がリチャード一派の市民層を味力にひき入れるための顧慮に する反応のしめる比重の相違である。モアの「歴史」では、その過 仰いだものと言われる。それ故この二者を比較することは、モアとて、その四幕四場までが殆んどモアの「リチャード三世」に資料を この比較で最もいちじるしく目立つのが、市民層のリチャードに対 シェイクスピアの特徴を際立たせるに役立つものと考えられよう。 ド三世の悲劇」(The Tragedy of Richard III)はホール(Hall) てきたが、シェイクスピア(William Shakespeare)の「リチャ 以上、モアの「リチャード三世の歴史」のあら筋と問題とを述べ ホリンシェッド (Hollinshed) 6 だが、ま、万事、 編年史 (Chronicle) を介し

中しておくんだ。」とおずおずと首を振って 傍観している 民衆にす申しておくんだ。」とおずおずと首を振って 傍観している 民衆にすする市民層の立場を確実に打ちたてたかったのであり、更に自己の属と目に映って無視することはできなかったのである。ロンドン育ちのモアだない。しかもその僅かな顔見せとして登場するだけで、劇の進行する市民層の立場を確実に打ちたてたかったと言うこともできるのモアあるう。だがモアの進行を表しておくんだ。」とおずおずと首を振って 傍観している 民衆にす中しておくんだ。」とおずおずと首を振って 傍観している 民衆にす

義王制の国王と対外的対内的に国民的統一を念願している新興の市 Court)の星室裁判所(Court of Star Chamber)や衡平法裁判 民の利害が一致して教会の特権に対立した形である。しかし、元来 民層にとって、コモン・ローは共通に支持されるべきものであっ 会法の領域と対立するものであり、その意味で勃興してきた絶対主 のコモン・ローは、イギリス固有の法として、イギリスの国王にと ていることを快しとしない点では同様であった。国王と市民はお互 所の創設は、コモン・ローとは別個の法領域を拡大し、国王の大権 た。「リチャード三世の歴史」に現われた状態は、この様に国王と市 ってもまた市民にとっても、それが王国内に治外法権を堅持する教 点で一致していた。「リチャード三世の歴史」でうかがえるト いに利用しあいながら、 くローマ・カトリック教会の国際的な王国が、ゆるぎなくおさまっ に入るばかりであり、国王も市民も自分の国内に法王を上にいただ とが推察されよう。だがこの時代には、絶対主義王制も漸く確立期 てモアの立場は、絶対主義王制を弁護するところに必ずしもないこ を伸ばそうとするものであった。これが市民層を背景とするコモ いことを意味する。ところが、 いわゆる大権裁判所 (Prerogative コモン・ローの支配は、王といえども法の前には従わなければならな たので「法の支配」の伝統は断ち切られることなく発展する。こ モン・ローという固有の形をとって堅実に発展を遂げることにな と対抗すべきものであることは明らかである。ここにおい 国民的な近代国家を確立しようと念願する マス

モアの立場は、正にそのような表現であった。

方コレットのすすめにしたがって、法学研究の時代に聖ロ 代者をあつかうものであり、また「リチャード三世」は前述したよ てきた。ここで注意されるのは、「ピュ伝」 といえども モアの同時 古典の世界から現実の世界へ深化され逞ましくなっていくのを調べ をアウグスチヌスが書かなければならなかった歴史的事情を語り、 会で、アウグスチヌスの「神の国」(de Civitate dei)をモアが講 つものであり、モアの歴史的感覚へ通うものがあることである。一 詩的価値を問うよりはモア身辺の事情、出来事をしのばせるに役立 ピコとリチャードという正反対な表現をとってはいるが、そこには 困難の感じはあるが、そこにはモアの同時代史への不断の関心と、 からであろう。「ピコ伝」と「リチャード三世」では、その性格の 中に自らアウグスチヌスの歴史哲学をにじみださせたものであった それを切りぬけるアウグスチヌスの人間的苦悩を明らかにし、その れ程の魅力を発揮した理由には、旧来の神学臭をぬけて、「神の国」 うに明らかにモアの同時代史であった。更に初期の四つの短詩も**、** 大きな違いから、一見モアの一貫した思想の流れをみいだすことが 一様に歴史を貫く独自の倫理感への信頼が 横たわっている。「リチ 「ピコ伝」「リチャード三世」とたどってモアのヒューマニズムが ロンドンの多くの聴衆を集めたと伝えられるが、若いモアがそ ド三世の歴史」が一五一四年に中断されたままに終ったのは、 レンス教

国、そして原始キリスト教の理想が、脈々として流れている。 ア」の思想の源流であるプラトンの共和国やアウグスチヌスの神の の鋭さが加わってくる。その現実分析の深化の根柢には「ユトーピ を積むことにより、「リチャード三世」から「ユトーピア」 へとそ た。ヒューマニスト、トマス・モアの史限は、 判である。これは「リチャード三世の歴史」のような形では書けな くなったため、フィクションに姿をかえた モ ア の 同時代史であっ た第二部も仔細に調べれば、 社会を直接批判した第一部だけでなく、 五一五年にはモアは「ユトーピア」の執筆にとりかかる。イギリス 主の様相を帯び、そのまま続稿したのでは発表の可能性も見込めな くなってきたからであろう。 マニストとしての理念と市民生活を代表する法律業務の実践と かくして「ユトーピア」の中に結晶されたといえる。 ィ八世(Henry VIII 1509~1547)が次第に専制君 多忙の故の中断と言われながら、翌一 イギリスの現状に対する諷刺であり批 ユトーピア島の状況を描い 法律家としての経験 ۲ ع

schen Einleitung. 争の時代を第二期、晩年の獄中よりの書簡を第三期としている。 by W. E. Campbell. の Preface(1981)で、編者キャンブルは モフの英文作品を三期に分け、青年壮年前期を第一期、 Thomas More und seine Utopie mit einer histori-The English Works of Sir Thomas More, Vol. I. ed. Karl Kautsky. (1887 初版, 1907 川阪)が 宗教的論

- 代表的。
- がある。 pleton, J. E. Bridgett をはじめカトリック者の研究が多い。 新しくは Saint Thomas More, by E. E. Reynolds (1957) 一九三五年モアはカ クの聖列に加えられた。 P. Sta
- 4 F. Rogers. (1947) The Correspondence of Sir Thomas More, ed. by E.
- (40) Eng. Works of T. More, op. cit., pp. 327~ 344. Early
- 6 las. (1901) vol. I. p. 226, Ep. 110. The Epistles of Erasmus, ed. & tr. by F. M. Nicho-
- 7 The Renaissance, by Hans Baron, pp. 55~6. ssance (1957) Chap. III. Fifteenth-Century Civilisation & The New Cambridge Modern History I. The Renai-
- には消極的である。 Europe 1470 to 1520 by R. Weiss. しかしガレン「イタリア ンツェの対立矛盾といったルネサンスの古典的なとらえ方の強調 のヒューマニズム」(1947)(清水純一訳)は、パドヴァとフィレ Ibid., Chapter V Learning & Education in Western
- (๑) The Renaissance: Studies in art & Poetry; W. Pater (1873).Pico della Mirandola
- (A) The Eng. Works of T. More Vol. I. op. cit., pp. 345

Wynkyn de Worde 版 William Rastell (1557) 版の紹介があ G. Doyle-Davidson には当時の版本として、John Rastell 版、 396. 更に同書 p. 221 Notes on the Collations. by W.

- Ibid., p. 18, Introduction, by A. W. Reed. ヒムる。
- 後者は学問を役立てて仕官することを勧められたのに答えたもの Andrew Corneus 宛一通。前二者は甥の悩みへの助言であり、 部の仕官反対の説が想起される。Ibid., pp. 374~380. Ibid., p. 363. 甥 John Francis へ二通、イタリアの貴族 御用学問となる危険を説いている。モアの「ユトーピア」第
- ヴァルガタ聖書の詩篇第十五篇。
- Ibid., pp. 381~396.
- More, op. cit., pp. 9~10. epist. pp. 347~8. 及び The Correspondence of 4 Н
- duction, by A. W. Reed. による。 Eng. Works of T. More. Vol. I. op. cit., p. 18, Intro-
- Ibid., p. 363.
- (1486)「人間の尊厳について」(植田敏郎訳) pp. 7~8. Oratio, de Dignitate hominis; Pico della Mirandola
- (2) Eng. Works of T. More Vol. 1. op. cit., p. 18, Introduction, by A. W. Reed.
- (ন্ন) Citizen Thomas More and his Utopia; Russel Ames

- ン市民層とトマス ・モアという問題点を積極
- 21 的に示している。 Eng. Works of T. More Vol. I. op. cit., pp. 398~455.
- The Authorship of the "History of Richard III" by R. of Richard III" by W. A. G. Doyle-Davidson 及じ p. 24 W. Chambers 参照。 Ibid., p. 42, The Textual Problems of the "History
- (The Works of Shakespeare) ed. by John Dover Wilson III" by W. A. (1954), Introduction ヒよる。 Ibid., Textual Problems of the "History of Richard G. Doyle-Davidson. 及び 'Richard III.,
- (전) Ibid., J. D. Wilson # 同様な方向にあるとみられる。 み、モアの市民層への強調を指摘している。R. Ames の見解と Introduction で両者の比較を試
- The Tragedy of King Richard III, Act II. Scene III. (外 内逍遙訳、リチャード三世 p. 117) The Works of Shakespeare, Globe edition (1953) p.603.
- 英米法における「法の支配」伊藤正己著 A Concise History Law, T. F. T. Plucknett.

(イギリス法制史・総説篇上 伊藤正己監修訳)

モア」が丹念に跡づけられている。 ーマス・モア 沢田昭夫著(1959)には、法の人「トマス (一九六〇・四・六)

料

### ゥ ア ゴ ゥ 研究文献 (三)

ストリとD・フレイシャ

複雑なゴドウィンの思想を、どのような視角から、いかなるものと

理解するかということである。

のコドウィン研究を紹介したが、そこで問題となることは、極めて

guage Quarterly, コドウィンが功利主義と対立していることが強調される。プリース ン的合理主義を真の基礎としていることを示そうとした。そこでド 主義、功利主義よりは、真理の独立性と価値の絶対性を説くプラト 通じて、それがフランス唯物論者の機械論的、快楽主義的道徳相対 理学に求め、そこから道徳哲学→政治哲学→経済思想という展開を ルバック、エルヴェシウス、ハー カドワース、クラーク、 ー、ハチスン、ヒューム、ミルトンなどの影響が重要視され、 ーストリは、ゴドウィンの思想の最初の前提を形而上学と心 4, 1943) という論文もあって、 Political Justice," (Modern Lan-エドワーズ、フォーセット、シャフ トリ、ベッカリアに対して、 ゴドウィンに プラ

おけるプラトン主義の指摘は、彼の中心課題といえよう。

自

厚

viduality, sincerity などの価値を含んでいて、快楽はむしろこれ 物論とイギリスの非国教神学系の伝統という思想の二重構造を通じ らの追求における副産物となっているところにその特異性があるの ベンサムにおけるような単純な快楽算術に終るのではなく、ipdi て、後者の優位を説く見方はまことに興味深い。実際彼の体系は、 楽説とは明らかに異なっているので、その相違を考えることは重要 ゴドウィンの思想は、エルヴェシウス=ベンサム系の利己的な快 相対的な功利主義と絶対的な合理主義、フランス系の唯

云い切ることには異論があろう。D・H・モンロウは、これは或る 役割を果しているのだから、彼の思想を功利主義に対立するものと ェシウスの功利主義を学び、これをイギリスに導入する上に大きな 八世紀の共通の思想の進展の中で、特に親しくドルバックやエルヴ しかしながら、ゴドウィンもまた自然法から功利主義へという士

三七